小石川フィロソフィーⅢ

近現代文学研究(「夏目漱石」研究)

国語科

1. 目的

夏目漱石が亡くなる2年前に学習院大学で講演した内容、『私の個人主義』から「エゴイズム」とは何であるか、そこからの脱却、「真の自由」とは何であるかを哲学的に考察していく。また、研究を踏まえ「自分らしく生きる」ということを考察し、自らの生き方を導き出す。

2. 概要

本講座においては、夏目漱石の概要解説講義からスタートし、調査活動、研究テーマ決定を行う。その後、先行研究調査・考察活動を通じて、秋に中間発表を行う。更に、教員からのフィードバックを元に、再考察を行い年度末の発表会に臨む。生徒たちは積極的に漱石の作品を読み、人物考察を行い、漱石の哲学的思想に触れ、自らの今後を考察していた。受講人数は今年度 12 人で行った。

表1 年間指導計画

4月	ガイダンス
5月～6月	漱石概要解説講義 漱石周辺調査活動 研究テーマ決定・目次提出
7月～8月	先行研究調査活動 漱石作品研究 中間発表準備
9月～10 月	中間発表会開催 担当教員によるフィードバック
10 月～11 月	漱石周辺再調査 漱石関連書籍先行研究調査・考察 「自分」考察と哲学的研究
11 月～1月	研究レポートまとめ・提出
2月	論文指導・作成
3月	小石川フィロソフィーⅢ発表会

3. 成果と課題

普段、読書が習慣になっている生徒でも、近代文学へのハードルはなかなか下がらない。始めは漱石作品への抵抗もあった。しかし、人物考察、社会背景考察、先行研究の考察などから、作品の読み取りに変化が生じ、近代文学へのハードルも下がってきた。更に明治期と現代社会の比較も行い、日本社会の変化と普遍的な部分を理解し、漱石の哲学に触れ、自らの人生を深く考えるようになった。教員はなるべく誘導をかけず、個々の生徒が自由な発想で研究できるようアドバイスを行い、フィードバックを行うよう心掛けた。

小石川フィロソフィーⅢ

現代短歌

国語科

1. 目的

各自歌集を編むことを目標とする。現実世界で取るに足らないもの、弱いもの、価値のないものが、短歌の世界では価値をもつ。逆に、現実世界で価値のあるものは、短歌の世界でほぼ無価値だ。たとえば、因果関係、時系列、整合性など論理的なもの。現実世界の価値と異なるものが詩を作り出すという体験により、新たな価値観を獲得させる。

2. 概要

初めに、短歌の入門書を読み、初心者が陥りやすい注意点を確認した。次に、各々興味をもった歌人の歌集を読み、作歌のためのアイデアを獲得したり、表現の型を学んだりした。並行して、短歌を週に一首詠み、推敲を繰り返した。

表1 年間指導計画

4月	ガイダンス
4月～6月	受講者全員が異なる短歌の入門書を読み、その入門書に書かれている内容をプレゼンテーションする。短歌を週に一首詠み、歌会を行う。
6月～7月	それぞれ興味をもった歌人の歌集を読み、歌の分析を行う。短歌を週に一首詠み、歌会を行う。
9月～11 月	作品展に応募する。6～7月の分析内容を PowerPoint 資料にしてプレゼンテーションする。短歌を週に一首詠み、歌会を行う。
12 月～1月	研究内容を決めて、各自分析または創作する。
2月	研究成果をまとめる。歌集を編集する。
3月	プレゼンテーション練習及び研究の振り返りをする。

3. 成果と課題

価値の逆転した世界に触れることにより、日常を注意深く、ユニークに分析していく面白さを味わえたようだ。受講者一人一人の中に、五七五七七の心地よいリズムや、ことばへのこだわりが根付いたようである。

小石川フィロソフィーⅢ

三大宗教とその周辺

社会科

1. 目的

三大宗教とされるキリスト教・イスラーム・仏教および日本人の宗教観の概要についての講義を受け、各自が関心に応じたテーマを設定して調査・研究・発表を行うことを通して、調査研究の基礎を体験することを目指した。

2. 概要

表1 年間指導計画

4月～8月	・「宗教」の成立・発展、三大宗教及び日本人の宗教観について講義を行い、基礎知識を定着させるとともに、関心分野の拡大を図った。 ・夏季休業中に研究のテーマの設定をさせた。
9月～12 月	・個人の調査テーマについて、生徒自身での調査・研究を行わせ、適宜アドバイスを与えた。 ・中間報告を行い、他の生徒との質疑応答・自己評価・相互評価を行った。 ・プレゼンテーションソフトによる発表の方法について実例を用いて講義し、技術の習得を図った。
1月～3月	・発表会に向けて予行を行い、適宜指導を与えるとともに、自己評価・相互評価を行った。 ・全体発表会を実施した。

3. 成果と課題

1学期の講義を通して、「宗教」に関する知識が少ない生徒も、基本的な知識を持ち、一定程度の理解の段階に達したので、各自のテーマ設定に困難を来すことはなかった。

単なる「調べ学習」ではなく、主体的な考察・研究活動にするため、頻繁に中間報告を行い、随時アドバイスを与えた。その結果、3年次生としては高レベルになり、プレゼンテーションソフトを利用した発表は、意欲的なものになった。調査結果に対する考察の成果が表れたものと考える。

一方、生徒の興味・関心を優先するため、設定されるテーマは、一般的な宗教だけでなく、心理学・社会学・歴史学にも範囲が広がり、非常に多岐にわたるものになる。本年度は音楽への影響や美術のアトリビュートなどもテーマに上がった。そのため指導者側の準備・研修が膨大なものになる。この点についての支援を充実させる必要がある。

小石川フィロソフィーⅢ

小石川から始める多文化共生（実践編）

社会科

1. 目的

多文化共生について、考えるだけでなく自分たちでできることを実践してみよう、というのが本講座の目的である。

「小石川」を意識させることで、多文化共生が生徒にとって遠い世界で起きている事ではなく、身近に存在する課題に目を向けさせたいと考えた。またタイトルの「実践編」には、課題解決に向け中学生なりの具体的な一歩を踏み出して欲しいという願いを込めた。

2. 概要

1学期は、身近な「分かり合えていない現実」＝課題を探るため、ABK（アジア文化会館）に留学しているアジアからの留学生にインタビューしたり、アメリカから来校したネイティブアメリカンの高校生とディスカッション等を行った。

夏休みには、各生徒が興味をもった地域にフィールドワークを実施した。2学期は、対象として選んだ地域の課題解決にむけて、歴史的な経緯を調べたり、当事者に問題意識をインタビューしたり、他国・他地域の事例に学んだりしながら、課題解決の方法を探っている。

主な研究テーマは、「川口市におけるクルド人との共生を、クルド人の視点から捉えなおす」「小石川に留学生が来るとしたら？小石川生用ハンドブックの作成」「芝園団地の外国人向けパンフレットを改訂する」など多岐にわたる。

表1 年間指導計画

4月	ガイダンス
5月～6月	ABK（アジア文化会館）訪問 米・ネイティブアメリカン高校生来校
7月～8月	夏期休業中の課題として、各自が選んだ地域にフィールドワーク
9月～2月	各自の研究テーマを設定 先行研究の調査 各自でフィールドワークやインタビュー 中間発表 研究内容のまとめ
3月	小石川フィロソフィーⅢ発表会

3. 成果と課題

互いのテーマ設定や中間報告に対するディスカッションを通して、自分の考えを深め、整理する過程自体が、彼らにとって大きな学びとなっていると感じる。

小石川フィロソフィーⅢ

数学研究

数学科

1. 目的

数学には統計、解析、代数、幾何、折り紙、パズルなど魅力ある様々な内容があり、数学への興味、関心は人それぞれだ。この講座では研究テーマを設定して研究を進め、校内外でのポスター発表やパワーポイントを用いたプレゼンテーションの実施など、研究について必要なことを一通り経験する。

2. 概要

一年間を通して、一人ひとり研究テーマを決め、発表に向け研究を進める。導入では、研究テーマのヒントを探すため、これまで扱った研究を知り、身近な数学を探す。その後それぞれの研究するテーマを決定する。

テーマを決めた後、研究方法を全体に向け発表し意見をもらってから、研究をスタートする。研究を進めながらポスターとパワーポイントを作成する。その後、外部で発表を行う。（以下、表1の年間計画を参照）

表1 年間指導計画

4月	ガイダンス
5月～6月	・先輩方が扱ったこれまでの研究テーマを知る。 ・身近な数学を探す。
7月～8月	・研究テーマにするものを発表 ・それぞれ研究を進める。
9月～10月	・研究の中間発表
10月～11月	・ポスター作成
11月～1月	・ポスター完成、発表（外部での発表）
2月	・パワーポイント作成
3月	小石川フィロソフィーⅢ発表会

3. 成果と課題

一人ひとりが自分らしいテーマを決め研究に取り組めることができた。研究を進めるにあたり、既習事項では知識面で難しい場合もあったが、アプローチを工夫することで、クリアすることができた。発表までのスケジュールを確認しながら授業は進めたが、ポスターを完成させるための時間が多く必要であった。

また、校外での発表活動を通じて、学術的な表現力、思考力、判断力を磨くことができ、今後の探究活動に必要な基礎力を身に付けることができた。

小石川フィロソフィーⅢ

自然科学・探究活動の基礎

化学科
生物科
化学科

1. 目的

本講座では、自然科学の探究の方法の基礎を学ぶことを目的としている。本講座を通して、課題研究の基礎的な技能を身に付け、次年度以降の課題研究が充実し、継続した研究となることを目標としている。研究成果の発表を目指し、検証実験を早期から行い、探究の過程を何度も繰り返す中で、リサーチクエッション及び検証計画のブラッシュアップを図りながら、生徒の探究力の向上を図った。

2. 概要

最初に、共通講座として、自然科学の探究に必要な基礎的な内容を学習した。その後、テーマを定め、グループに分かれて、個別に指導した。年に数回の講座内発表会だけでなく、成果を校内だけでなく、校外でも発表した。

表1 年間指導計画

4月	ガイダンス
5月	実験データの取り扱い、研究テーマの検討方法などの科学研究に必要な思考の構築
6月	検証実験計画の立案とブラッシュアップ
7月～8月	各自の課題研究・データ解析、中間発表会
9月～11月	各自の課題研究・データ解析、報告会 校内の Adv.フィロソフィー発表会等への出品
12月	都内 SSH 指定校合同発表会への出品
1月～2月	発表資料作成・準備、報告会（リハーサル）
3月	発表会

3. 成果と課題

多くの生徒が、講座内での実験だけでなく、放課後や休日のオープンラボを利用した。また定期的に報告をする機会を設け、研究をまとめることで、課題を明確化し、自分たちの考えや視点を再構成できるように、指導計画を工夫した。そのため、校内の「Adv. フィロソフィー発表会」や都内 SSH 指定校合同発表会に参加させた。

生徒の中には、所属する科学系部活動においても、コンクールへ出品した生徒もいる。今年度出品したレポートの1つが、日本学生科学賞中央最終審査において科学技術政策担当大臣賞を受賞した。本講座から中央最終審査に進み、かつ大臣賞を受賞するのは3年連続である。

小石川フィロソフィーⅢ

体育・スポーツ

保健体育科

1. 目的

本講座では「運動」に関する疑問や課題の解決を目的としてテーマを設定し、ふさわしい研究方法や研究の進め方を学んでいった。最後にまとめと発表を行い、研究内容を他者に伝える力を養った。

2. 概要

本講座では生徒が興味・関心をもった「運動」に関係するテーマについて、個人またはグループで、実証実験や映像分析などを通して研究を行った。その研究の概要を報告書にまとめ、さらに発表会に向けて聞く側が分かりやすいように資料を作成し、発表練習を行い、発表会の運営も行った。

以下のような運動種目が、研究のテーマとなった。

・バスケットボール　・バレーボール　・公式テニス
・サッカー　・陸上競技　・水泳　・ダンス　・野球

表1 年間指導計画

4月	ガイダンス
5月～9月	テーマ設定のための、情報収集。実験方法の検討。実験・研究の開始。
10 月	中間発表
11 月～1月	実験・研究 発表に向けての準備 報告書の作成
2月	講座内発表会
3月	フィロソフィーⅢ発表会・報告書提出

3. 成果と課題

自ら日頃から感じている「運動」に関する疑問や課題をテーマとしたことで、年間を通じて真剣に取り組ませることが出来た。また、お互いの研究を共有することで、同じように「運動」を研究するにも様々な方法があるという事を学んだ。

初めての課題研究となったため、設定したテーマや仮説に対して、十分なデータ量や最適な研究方法がとれたとは言い難いが、自らがテーマを立てて研究し、発表するという一連の流れを学び、経験することができたという事は、今後のフィロソフィーの活動にとって大きな学びになった。

小石川フィロソフィーⅢ

Let's Try English Drama!

英語科

1. 目的

英語劇の練習と発表を通して、英語力（特に読む力と話す【発表】）の力を伸ばすとともに、クラスメイトと協働して一つの芝居を創りあげることにより、コミュニケーション能力の身長を図る。

2. 概要

1学期は一つの演劇を創りあげるにはどのように稽古の計画を立て、演出や照明、音響プラン作成していくのかを学ぶために上演作品を担当者が選択し、学期末に本校教員を招いて校内公演を行った。2学期は12月の英語劇都大会に出場することを目標に生徒に上演作品を決定させ、稽古や衣装の作成をしたり、照明や音響プランを考えさせたりしてその準備を行わせた。大会では特別賞を受賞した。3学期は、1・2学期の経験を踏まえ、演劇や演劇教育に関してトピックを各自が決め、リサーチと論文の作成を行った。

表1 年間指導計画

4月	ガイダンス
5月～7月	芝居の稽古、発音の指導、音響・照明プランの作成、校内発表 上演作品： *I will never forget you*
9月～12 月	芝居の稽古、発音の指導、音響・照明プランと衣装の作成、都大会出場 上演作品： *A Lion Standing against the Wind*
1月～3月	・ 論文のトピックの決定と報告 ・ リサーチと論文作成 ・ クラス内報告会

3. 成果と課題

英語力の伸長はもちろんのこと、登場人物の気持ちや置かれた状況、作品の背景を考えながらテキストを読み込み、演技をする経験を通して、他者の感情を理解したり共感しようとしたりする力がついたのではないかと思う。日本では演劇教育があまり盛んではないが、本講座の指導をする中で、演劇が持つ大きな教育的効果を実感した。

この経験を通して身に付けた表現力や共感力を、後期課程の英語教育においてさらに伸ばしていくことが今後の課題である。

小石川フィロソフィーⅢ

SDGs 研究とディベート

英語科

1. 目的

(1)SDGs に関する問題について知識を深める。

(2)SDGs に関する問題についてディベート練習、外部の大会への参加を経て、ディベート力を伸ばす。

(3)SDGs 及びディベートに関しテーマを設定、英語論文を作成する。

2. 使用教材

SDGs core 英語長文―Think, Share, Act―(三省堂)

3. 概要

表1 年間指導計画

4月	ガイダンス ディベートのノウハウの説明
5月～11 月	文献で SDGs 関連の問題について知識を深め、また英語ディベートの基礎を身に付ける。 授業で行ったディベートテーマ例 ①(Gender Equality) Paternity leave in Japan should be as long as maternity leave. ②(Quality Education) People should have to pass a literacy test to be able to vote in elections.
12 月～1月	1月に行われるディベート大会に向けたディベート練習
1月 21 日	PDA 東京都中高一貫校中学校即興型英語ディベート交流大会2チーム参加 (4人または3人一組) 富士高校附属中にて
1月～2月	SDGs またはディベートに関してテーマを設定し、英語の論文を作成
3月	小石川フィロソフィーⅢ発表会

4. 成果と課題

成果：(1)ディベート大会に参加することにより、対戦校からよい刺激をうけ、ディベートのレベル向上につながった。

(2)ディベートの準備を通して知識が深まり、新しいものの見方を身に付けることができた。

課題：3学年は夏に海外語学研修があるため、9月の大会(全国中学生英語ディベート大会(HEnDA))は準備ができず参加できないのが残念だった。